

杜の都、仙台市において今年の老年医学会学術集会が開催された。街を濃い緑に染める街路樹は、風雪に耐え、長い歴史を刻み、行きかう人々を癒してきた誇りをも感じさせた。

学会での特に興味を刺激されたテーマは、「人生100年時代における高齢者の今後」、ひたすらに延命を追求する医学に対して、肉体と精神のバランスを保つ「平衡老化」の考え方、そして民俗学者の語る「現代人の死生観—QOLはQOD」の3題があった。

津々浦々で語り伝えられてきた物語に裏打ちされた民俗学者の「死生観」に関する講演では、死生観は文化であると表現していた。時代と共に文化には変遷がある。元気な産声でもって生命がスタートした時代から、超音波でもって母親の胎内に胎児の心臓の鼓動を聞くことが可能となった時代の生命に対する考え方は異なってくる。

時計の文字盤に例えて、生命の誕生から100日、七五三、13祝い、成人式、結婚、還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿、百寿・・・と「生」の営みが刻まれ、「死」についても葬儀の後、初七日から四十九日忌、百か日忌、一周忌から三十三回忌まで、時計の針は「面」を刻んで行く。

これらの場面は、「〇〇家」と称される「家」が引き継いできた。現代社会は、「家」の概念が希薄になってきた。「面」を刻んできた「生」の営みが直線に変化してきた。「納骨」ではなく、「散骨」の儀もある。直線は途絶え、終止符を連想させる。

しかし、現代社会においてもすべてが終わるのではなく、「来世」「浄土」「天国」「生まれ替わり」等、別の次元を思い描く人も多いとの結びであった。

医学は単なる延命ではなく、「QOL」、生活の、命の質を重視する時代になった。QOLの向上は、即、「QOD」、Dying（死への過程）をも重視する文化の創造へとつなげることの必要性を説いた内容の講演であった。

老人保健施設の勤務の場面においても考えさせられる医療の、命の「質」を重視する姿勢を問われた課題だと心に刻んだ。現代社会における直線化の文化も、すべてが終わるのではないと考えたい。

ツクマイのゆんたく
ゆんたく
ひんたく

517

「死への過程」も重視

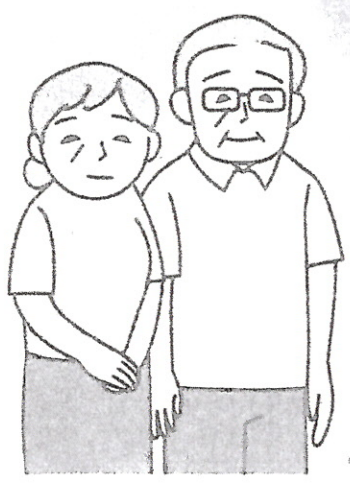
杜の都、仙台市で今年の老年医学会学術集會が開かれた。街を濃い緑に染める街路樹は、風雪に耐え、長い歴史を刻み、行きかう人々を癒やしてきた誇りをも感じさせた。

石川 清司

(介護老人保健施設「あけみおの里」)

学会で特に興味を刺激されたテーマに、「人生100年時代における高齢者の今後」、ひたすらに延命を追求する医学に対して肉体と精神のバランスを保つ「平衡老化」に加えて、民俗学者が語る「現代人の死生観—QOLはQOD」があった。

現代人の死生観



ターゲットした時代と、超音波でもって母親の胎内に胎児の心臓の鼓動を聞くことが可能となった時代とでは、生命に対する考え方は異なってくる。

時計の文字盤に例えて、生命の誕生から100日、七五三、十三祝い、成人式、結婚、還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿、百寿…と「生」の営みは刻まれる。

「死」についても葬儀の後、初七日から四十九日忌、百日忌、一周忌から三十三日忌まで、時計の針は「面」を刻んでいく。

直線は途絶え、終止符を連想させる。しかし現代社会においてもすべてが終わるのではなく「来世」「浄土」「天国」「生まれ替わり」等、別の次元を思い描く人も多いと講演は結んだ。医学は単なる延命ではなく「QOL」つまり生活、命の質を重視する時代になった。QOLの向上は「QOD」、Dying (死への過程) をも重視する文化の創造へとつなげる必要性を説いた。

(老年医学)

津々浦々で語り伝えられてきた物語に裏打ちされ、民俗学者は「死生観は文化である」と表現した。時代と共に文化は変遷する。元氣な産声でもって生命がス